

世界の宗教史における法華経

M・E・エルマコフ

佐藤裕子 訳

煩惱の泥沼に咲きながら、その汚泥に染まることのない清浄無垢な蓮。蓮の華は悟りを開いた仏の玉座の象徴でもあり、浄土を想起させる。仏教の普遍的なシンボルであるこの蓮の華は、その名を冠する経典において「世界に開かれた妙法蓮華」というさらに新たな意味を帯びた。

仏教界とその教義に与えた影響の大きさの点から言っても法華経と比肩する経典はない。北東アジア、極東地域において、法華経、つまり「妙法蓮華経」の経典としての地位は一層高いものとなり、威光を放つようになった。現代の宗教活動家であり、社会活動家である池田大作氏も、「『妙法蓮華経』は、諸経の中で唯一真実の教えであり、経の王である」と確信を込めて述べている。法華経流布の歴史をその誕生から概観すると、この「蓮華の法」は世界宗教として確固とした地位をすでに不動のものとしたことがわかる。

‘Saddharma-puṇḍarīka-sūtra’ (法華経) は、サンスクリット原典から最初に中国語に翻訳され、やがてチベット語、モンゴル語、満州語に翻訳された。19世紀後半に入ってから、ヨーロッパの諸言語への翻訳が始まっている。近年、ロシア語版としては、A・N・イグナトヴィチ訳の優れた露訳『法華経』が1998年に出版された。この露訳本には、本文の訳文はもとより、その解説、さらには詳細な注釈と用語解説が掲載されており、学術的裏付けの緻密さが際立っている。

だが、人間の能力には限界がある。それに対し、法華経の世界は廣大無辺である。この論文では、イグナトヴィチが触れていない以下の点を明らかにするために論考を進めてみたいと思う。

・法華経がはじめにインドから中国、日本などの東洋の国々へ広

まり、やがて東方から西欧諸国へ、つまり西還し、全世界に流布した理由。

・仏教を世界に開かれた世界宗教へと昇華させた、法華経に説かれる仏の真意とは何か。

・世界の宗教史における法華経の位置付け。

ここでは、文献の出典および訳語の優位性について論ずることはあえて差し控えておく。上述項目の考察へ移る前に、序論として次のことを確認しておきたい。

仏教一般の考え方として法華経は、釈尊の肉声を書き留めたとされる。だが実際の法華経編纂は、釈尊が生きていた時代よりずっと後に長い年月をかけて行われたと考えるべきである。そのため法華経は、それまでの小乗・大乘の対立を止揚・統一する内容を持ち、諸経典の中で最高の教典となったのである。歴史的な観点から経典を見ても、法華経が書かれた場所と年代を特定することは困難である。近代以降に、ネパール、カシミールや中央アジアで発見された最古のサンスクリット語の法華経写本は、5～6世紀より後のものである。だが、その一方で、最古の法華経漢訳本は、3世紀中頃のものとする。したがって、サンスクリット語による法華経の原典は、遅くとも3世紀前半には成立していたと考えられる。現代の仏教学者の多くも、3世紀初頭までに最終的な法華経編纂が行われたとの説に賛同している。

また、法華経誕生の地は、インド文化と古代ギリシア文化の融合により生まれたヘレニズム文化様式の寺院で名高いガンダーラであるとする意見も多い。しかし、多くの教義や思想を吸収しながら、長い年月を費やし完成した法華経に関しては、具体的な成立場所の特定は避けたほうが賢明であろう。

ただ確実に言える事は、宗教史上重要な意義をもつ出来事が、西暦2～3世紀頃にイラン高原で起こっていたという事実である。イラン高原は、当時、土着のゾロアスター教、ユダヤ教、キリスト教や仏教が交流する宗教の一大拠点であった。宗教が真理を求め、相互に影響を及ぼし合う坩堝であった。この地で大乘仏教は、大乘特有の熱心な布教活動とその適応能力を生かして、インド世界の枠をこえ、他宗教の要素を取り入れ、発展していったのである。

次に、仏教の世界観を揺り動かし、大きく変化させた法華経に説かれている

法門について、その要点をまとめてみよう。

- 1) 一仏乗 仏陀の口から法華經の真意が明かされた時に、説法を聴いていた衆生は混乱し動揺した。なぜなら、それまで仏陀により説かれてきた声聞乗、縁覚乗、菩薩乗の三乗の法は、衆生を真実に導くために状況に応じて使われた虚構、「方便」であったと知ったからである。つまり、法華經で説かれた仏の究極の真意は、三乗の法を説くことではなく、一切衆生を等しく成仏させる唯一の教法である「一仏乗」(buddha-yāna)を顕すことなのである。
- 2) あらゆる生命に存在する仏性 釈尊は、あらゆる生命に成仏への道が開かれていることをたゆまず説き続けた。このことを裏付けるために、釈尊の弟子となりながら反逆し、教団分裂の策をめぐらせ、釈尊に敵対・迫害した従弟の提婆達多にですら、過去世において釈尊の因位の修行の師であったがゆえに、法華經の功力により未来において必ず仏になるとの記別を与えている。「法華經」提婆達多品第十二では、提婆達多の悪人成仏と併せて、法華經の功德の深重を証明するために、八歳の竜女の即身成仏を述べ、畜生成仏、女人成仏も説いている。
- 3) 仏の本質 「法華經」如来寿量品第十六では、「仏は無始無終の生命であり、久遠の昔に成仏して以来、常に娑婆世界、また無数の国土に常住し、衆生を説法教化し続けている」という、それまで秘されてきた真実が明かされている。つまり、釈迦族の王子として迦毘羅衛城に誕生した歴史上の仏陀は、実際には、はるかな昔より存在していたのである。仏陀の涅槃は、弟子たちに師匠の死という現実に向き合わせ、その悲しみを通して真の信仰に目覚めさせるための方便に他ならなかった。仏は、久遠実成を明かし、機根が整い妙法弘通を付嘱すべき衆生を無量の国土で教化してきたのである。法華經には、こうした「地涌の菩薩」や「無上道」という主題が、あらゆる生命に仏性が存在し、一切衆生の成仏を約束する教えとともに説かれている。

法華經の思想はその後、中国の天台宗、日本の天台宗、日蓮の教え、そして新しい諸宗教へと受け継がれ発展していった。これらの教義については仏教学者の間でも広く知られており、詳細な研究が行われている。ここからは、法華經の注目されるべき点でありながら、これまで十分な関心が払われてこなかった側面を取り上げ解説していきたい。それは、經典ではそれほど明瞭に説かれているわけではないが、世界の宗教史との関連性を視座に考察した際に、法華經の本質的な要素として浮かび上がってくるものである。そして、実はこれが今回先に提起した問題に対する答えとなるのである。最重要のものから順に解説を試みよう。

・ 普遍主義的要素 (超普遍主義と呼ぶ方がより正確である)

法華經に見られる普遍主義的要素は、「一切衆生皆成仏」、「あらゆる生命に存在する仏性」といった概念に反映し、「一仏乗(一切衆生を等しく成仏させる)」の教法に結晶した。言うまでもなく、法華經の教えの普遍性は、大乘仏教の布教に傾けられた熱意と、仏教がそれまで歩んだ発展の歴史により育まれたものである。しかし、法華經の普遍主義的要素のもうひとつの源であり、普遍主義そのものを生み出す要因であったのが、究極の世界宗教の創出を熱望する世界的な潮流であった。

ここで、具体的な世界史上の一例を挙げておきたい。

法華經が初めて漢訳されたのとほぼ同じ時代に、ササン朝ペルシアのササン朝ド・シャープール1世(在位240~272 B.C.)は、帝国の体制作りの一環として、宗教政策に関する助言を求めため、預言者マニ(216~274 B.C.)を宮中に招き入れた。年代記には、この謁見に関する記録は残念ながら残されていない。だが、シャープール王の死後、迫害を受け獄死したマニの教えは、11世紀にアル=ビール=ニによっておおそ復元された。卓越した思想家であり、年代学の研究者でもあったビール=ニは、紛失し現存しないマニ經典『シャープールカーン』を所有していた。ここで、E・E・ベルテリスによってアラビア語から翻訳された經典『シャープールカーン』の冒頭をそのまま引用してみよう。

「神の使徒たちは、知恵と認識をもたらすために、時代から時代へと絶えることなく、地上にその姿を現す。ある時はインドの国に仏陀として生まれ、ある時はペルシアの国にゾロアスターとして、そして、またある時は西方の国に神の使徒イエスとして『知恵と認識』をもたらした。その後、この末世に、真理の神の使徒である私、マニによってバビロニアの国に天啓が降り、この予言が示されたのである。」⁽¹⁾

このマニ教の經典冒頭部分と、ほぼその同時期に記された法華經の一仏乗の教法は、明らかに形式上の類似を見せている。つまり、それまでの三つの教え、一マニ教では三人の神の使者の教え、そして法華經では三乗の教え—をもとに統合された教義を打ち立てている点である。しかし、より重要なことは、普遍のかつ究極の教義創出を目指した世界の宗教史の中で、紀元後まもなく誕生したマニ教と法華經の教義の間に本質的な類似性が見られる点である。

続けて、世界宗教に共通する要素を、法華經の中から抽出してみよう。

・**一神教的要素** 法華經の一神教的要素は、法華經以前の教えと密接に結びついており、L・グルヴィッツ、中村元をはじめとする仏教学者の研究書においても活発な議論が展開されている。最高神には、先に述べた普遍主義的な特長が備わっている。だが法華經における一神論的要素は、たいへん多面的な様相を見せる。仏は、生身の人間としての側面を超越した永遠普遍の「法」、つまり「法身」と成る。また、經典には「仏身」を具現化した無数の仏が登場する。衆生は「仏子」と呼ばれ、仏は自らを「慈父なる存在」としている（それでも、仏は創造神ではない。ここが法華經の一神論的要素とキリスト教のそれとは異なる点である）。

・**メシア（救世主）主義的要素** 法華經の一神論的要素は、世界の他の諸宗教の一神論と同様に、メシア主義的な要素を内包している。教主釈尊は、救済者であり、師であり、末法の衆生を成仏の大道へと導く指導者として現れる。終末論的な黙示録とは対照的に、

法華經では仏の住する仏国土・浄土は平穏安寧な樂園として描かれている。

・**終末論的要素** 仏教の教えには、もともと終末論的な要素が存在する。宇宙の完全な周期は、「成住壞空」の四劫を包含している。その第三の劫である「壞劫」は、長大な時間であり、様々な天災が起こるとされる。実は法華經の中には、「世界が燃えている」、「すべてが大火の中で燃えている」等、全てを消滅させる火のイメージが、反復句によって鮮烈かつ情動的に表現されているのである（全てを焼き尽くす火による終末観は、マニ教の悲劇的な基本思想を連想させる）。

・**聖人列伝的要素** 「法華經」從地涌出品第十五には、仏の音声に呼ばわれて地面が割れ、大地から仏を賞賛する無数の菩薩が涌出する様子が描かれている。「どこからそのような無数の菩薩が現れたのか」といぶかる質問に対し、釈迦牟尼仏は、「これらの地涌の菩薩は、師の最初の呼び掛けに応じて参集し、衆生を悟りに導くために、地の底でその時の到来を待っていたのだ」と答えている。

以上のように、法華經の教義は、世界の宗教史の相關図に照らしても、宗教として優れて豊かな精神性とその可能性を示しているのである。

今回の発表の最後に、仏教とその他の世界宗教というテーマで、ひとつの私の仮説を紹介させて頂きたい。もし、提婆達多の代わりに敬虔なキリスト教徒、あるいはイスラム教徒を取り上げ、「彼らにも仏性があり、仏になる可能性をもつ」と述べたとしても、法華經の精神を歪めることには決してならぬであろう。ただ仏教へ改宗するだけで、成仏が約束されるのである。このことから、熱心な布教活動が続ける仏教は、広く知られるように、寛容の精神に富んだ宗教であることが、よく理解できるのではないだろうか。

(M・E・エルマコフ／ロシア科学アカデミー東洋学研究所
サンクトペテルブルク支部哲学博士)
(訳・さとう ゆうこ／東洋哲学研究所委嘱研究員)

(本稿は、2001年9月18日に行われたシンポジウムで発表されたものです。)

訳者注

(1) 参照：『マニ教』、ミシェル・ダルデュエ著、大貫隆・中野千恵美訳、白水社

■特別企画として、池田大作創価学会名誉会長と米デンバー大学のベッド・P・ナンダ教授による文明間対話、「インドの精神——仏教とヒンズー教」を連載する。人類に重くしかかる地球的問題群をどう克服していくかが、多角的に語り合われていく。第一回は「人権」をめぐる諸問題。

「私は貧しい者の中に神を見ます。そして彼らを尊敬することは、私の救いのためなのです」「病人に奉仕することは仏に奉仕すること」とのヒンズー教の聖者の言葉と釈尊の教えが紹介され、人権擁護の原点がまずは示される。(Y)

■特集は法華経をめぐって。「法華経に書かれた仏の肉声、仏の言葉は、日蓮にとつてどのような宗教儀式や形式よりも重要であった」とヴォロビヨヴァ氏。末木氏は「末法という時代にあっても仏陀の精神を生かすことができるのか、それこそが日蓮が一生をかけて問いつけたことであつたと思ひます」と。法華経流布の歴史と精神性が語られる。(M)

東洋学術研究
第41巻第2号(通巻149号)

■
発行日

2002年(平成14年)12月15日

■
発行人

森 田 康 夫

■
発行所

財団法人 東洋哲学研究所

〒192-0003 東京都八王子市丹木町1-236

電話 0426(91)6591

振替 00130-7-122394

■
印刷所

明和印刷株式会社

〒113-0023 東京都文京区向丘1-5-2

■
落丁・乱丁本はお取り替えいたします。